

令和4年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

海と山

がおりなす歴史

第1回 5月21日(土)

縄文時代の海と山

—福岡市域を中心に—

福岡大学人文学部 古澤 義久 氏

福岡市埋蔵文化財センター講座室
13時30分〜15時00分 (13時00分受付・開場)
※各回の定員、申込方法は、市政だよりと市ホームページでお知らせします。

- 感染症の拡大状況により、上記内容を変更する場合があります。
- ご来場の前に福岡市埋蔵文化財センターホームページをご確認ください。

埋蔵文化財センター
ホームページ

「福岡市の文化財」
Facebook

入場無料

主催 福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田 2-1-94
TEL: 092-571-2921 FAX: 092-571-2825
電子メール: maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

講座とリンクした企画展

令和4年5月17日～
令和5年3月31日



縄文時代の海と山

—福岡市域を中心に—

福岡大学人文学部
古澤義久

I. はじめに

福岡市で考古学の世界と言え、やはり弥生時代が有名で注目されていると思います。しかし、それより前の縄文時代にも人々は活発に活動していました。その痕跡は現在の博多湾沿岸の海拔下から背振山系の標高約 250m 程度の山間部にまで及びます。ここでは多様な環境下で生きた縄文人の暮らしを考えてみたいと思います。

II. 縄文時代とはどのような時代？

縄文時代には様々な定義がありますが、「水田稲作以前の土器をもつ狩猟採集漁撈を中心とした時代」（泉 2013）という定義が一般的でしょう。「水田稲作以前」という箇所、弥生時代と、「土器をもつ」という箇所、旧石器時代と区分されます。縄文時代には土器の登場以外に、弓矢の登場や水産資源の積極的な利用もみられるようになりました。長い縄文時代ですが草創期—早期—前期—中期—後期—晩期の 6 時期に区分するのが一般的です。

III. 土器の出現と縄文時代の開始

これまで、日本列島における土器の出現は約 12000 年前と考えられており、更新世から完新世に移行し、気候が温暖化することでドングリなどの森林資源を利用するために土器が発明されたとされてきました。ところが、1990 年代後半頃から、年代測定法の進展により、16000 年前頃に土器が登場していることがわかってきました。氷期が終了する前に土器が利用されていたとすると従来の考え方は成り立たなくなります（工藤 2011）（図 1）。

東アジアでは約 20000 年前に華中・華南地方で土器が出現しています。華中・華南では土器の出現とほぼ同じ頃にイネも既に栽培されており、土器出現と農耕の関連が注目されています。

また、北方のアムール河流域のオシポフカ文化でも縄文土器に匹敵するほどの年代が示されています。沿海州や嫩江流域でも 1 万年以上前の土器が発見されています。これらの地域ではもともと細石刃文化が広がっていましたが、土器出現期にも残っています。燕山山脈南麓では土器の出現期にアワやキビが確認され、製粉具である磨盤・磨棒も発見されています。一方、北方の嫩江流域からアムール河流域にかけてでは栽培植物はみられません。農耕と土器が関連をみせる地域とそうではない地域に分かれそうですが、土器出現期に弓矢がみられることは共通しています。また、水産資源の利用も認められるようです（表 1）。

九州の土器出現期でも、土器よりはやや遅れますが石鏃が出土するように弓矢が出現しており、また長崎県佐世保市の福井洞窟でサバの骨が発見されているように水産資源が利用されています。そのような点では、アムール河流域から嫩江流域との類似性をみられますが、直接の関係性があるかどうかはわかりません。

日本列島での初現期の土器の出土量を検討した研究によると土器出現期では出土土器個体数が極めて少ないため（図 2）、日常的な調理とか大量の加工処理の用途は考えにくいとして、より限定的な用途や使用季節が考えられる見解もあります（谷口 2005）。当初の土器は生活必需品というわけではなく、土器の出現は大きな画期であっても、それによって急激な社会変化がもたらされたのではなく徐々に土器が必需品へと変化していったものとみられます。土器の用途についても様々な分析があります。落葉広葉樹が広がっていた南九州では、土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析を行った結果、動物質食料と植物質食料、海産物などを煮炊きしたものと考えられており（工藤 2014, 2015）、地域的な環境の違いによって土器の発生と拡散について様々な模式が想定できるようです。

IV. 福岡市域における縄文時代草創期～早期前半

縄文時代草創期～早期前半の遺跡としては西区の大原 D 遺跡、元岡・桑原遺跡群、早良区の松木田遺跡、南区の柏原遺跡などが知られています。これらの遺跡では条痕文土器、刺突文土器、捺糸文土器などの土器が出土しています（図 5）。しかし、先に述べましたように縄文時代草創期にはどの集団でも必ず土器を所有したとは限らないので、土器が発見されていない細石刃石器出土遺跡の中に縄文時代草創期の遺跡もある程度ふくまれていることでしょう。遺跡の分布としては標高 20～100m の山麓縁辺から斜面上の段丘附近に集中しています（図 4）。背面に急斜面を持つ狭い段丘という立地の共通性から意図的に生活圏を選択したと考えられています（本田 2013）。縄文時代早期前半の海水面は現在より 30m 程度低かったとみられています。現在では海に近接した大原 D 遺跡や元岡・桑原遺跡群でも海岸まで相当な距離があったと推定されています。草創期～早期前半の海辺の集落は現在の海水面下に沈んでいるものをみられます。そのため、現在知られている草創期～早期の遺跡は基本的に山辺の生活を示しているといえるでしょう。

大原 D 遺跡では住居跡が確認されていますが屋根を土で覆う構造の住居が復元されています。この遺跡では石鏃が 600 点以上も出土しており活発な狩猟が想定されています。縄文時代早期段階では現在までのところ多量の石鏃など狩猟具の発見事例が多いので、狩猟が主たる生業と考えがちですが、現在よりはるかに海水面が低位であったため当時の海辺の遺跡は現在海没しており、確認されている縄文時代早期の遺跡は内陸部や山間部の遺跡に限られている可能性があり、注意が必要であるという指摘（山崎 2007）もあります。また、西区の浦江遺跡では縄文時代早期前葉の貯蔵穴が発見されており植物採集も行っていたことがわかります。

V. 縄文時代早期後半以降の環境

縄文時代早期から温暖化が本格化し、縄文時代前期初頭には海岸線の内陸への進出が最大になるいわゆる「縄文海進」がみられます。山麓沿いの河岸段丘や沖積低地内の段丘に遺跡が分布します。カシやシイといった常緑広葉樹林が広がっていました。縄文時代中期には遺跡数が減少します。縄文時代後期初頭には寒冷化とともに海岸線が後退し、海岸が積極的に利用され、遺跡数が増大します。後期後半には自然堤防上や山麓にも遺跡が分布するようになります。晩期には 2 度の寒冷期がありましたが、海退に伴い利用可能となった低湿地周辺などに進出した集団もありました（本田 2013）（図 4）。

VI. 山麓の暮らし

1. 狩猟

縄文時代の遺跡からは普遍的に石鏃が出土し、弓矢猟を行っていたことがわかります。このほかに陸上獣を捕獲するための道具として石槍・尖頭器がありますが、九州では現在は絶滅しているクマを捕獲するのに用いられたと推定する見解（山崎 2007）もあります。

陥し穴を用いた猟も行われていました。博多区では南八幡遺跡、麦野 B 遺跡、南区では和田 B 遺跡、野多目 A 遺跡、井尻 B 遺跡、城南区では梅林遺跡、早良区では有田遺跡群、脇山 A 遺跡、原遺跡群、西区では羽根戸古墳群、浦江谷遺跡、浦江遺跡群、コノリ遺跡などで陥し穴が確認されています。中には逆茂木が設置された事例も確認されます。立地は標高 10～20m 程度の低丘陵上に多くみられますが、標高 80～90m に立地する事例もあります。列状に陥し穴が配列される事例も確認されます。丘陵の裾部や先端などに群集して設けられることもあり、動物が集まる谷の水場を意識して設置されたものもあります（図 7）。

2. 植物採集

植物採集に関連する道具として石皿、磨石、凹石などがあります。これらの道具は主に堅果類（どんぐりなど）を粉にするために用いられる製粉具です。日本の縄文文化の製粉具としての石皿・磨石の特徴は、主に回転運動により製粉を行うという点にあります。また、堅果類などを保存する遺構として貯蔵穴が確認されています。南区の野多目拈渡遺跡では縄文時代後期初頭の貯蔵穴が発見されておりイチイガシなどが出土しています。野多目 B 遺跡でも縄文時代後期初頭の貯蔵穴からカシなどがみつかっています。西区の吉武遺跡群では 46 基の貯蔵穴が確認されています。3 群にわかれ、ドングリなど種子が残存するものは 13 基、炭化物が残存するものは 15 基、

柱材・木材が残存するものは6基ありました(図8)。早良区の有田遺跡群では貯蔵穴とみられる土坑群が発見されていますが、環状にめぐると異なる配置となっています(図9)。太さ30~50cm前後の柱の痕跡が残るものもあり、標柱などの可能性も考えられています。

また、早良区の四箇遺跡では縄文時代後期後葉の特殊泥炭層からドングリ、エゴノキ、クルミ、クリ、アズキ、センナリビョウタン、ヤマグワ、カジノキ、野生イチゴ、木本ニワトコ、コアカソなどの種子が出土しています。

3、農耕

(1) 土器圧痕

縄文時代の農耕については様々な意見が存在します。小畑弘己氏の研究によると土器にみられる圧痕の分析からダイズやアズキのようなマメ類は中部地方から西関東で縄文時代早期から中期にかけて大型化、即ち栽培化され、縄文時代後期初頭頃に東九州でマメ類の栽培が始まり、後期から晩期にかけて九州中に広がるとされています。福岡市でも大原D遺跡や四箇遺跡(図10)などでマメ類の土器圧痕がみつかっています(小畑2016)。

韓半島南部では新石器時代前期(縄文時代前期中葉)にはアワやキビの農耕を行っており、新石器時代中期(縄文時代前期後葉~中期)には普及していました。そして青銅器時代にはアワやキビに加え、イネも栽培されるようになっていました。このような渡来系穀物は九州にいつから存在するかは議論がありますが、小畑弘己氏によるとイネ、アワ、キビなどの大陸系穀物の土器圧痕が確実に確認されるのは刻目突帯文土器期、弥生早期の最古段階のようです(小畑2018)。

(2) 焼畑の可能性

大原D遺跡では縄文時代晩期中葉を中心とする時期の拠点集落域である標高6~14mの扇状微高地から西に200mほど離れた標高31~41mの丘陵南斜面の16-2区大量の炭化物を含む層が確認されています。厚み20~30cmの単一の包含層で炭粒を含み、植物珪酸体の分析からエノコログサ属が一定量検出されています。この層を焼畑によって形成された層であるとみる見解があります(山崎2005)(図11)。

(3) 溝状遺構

福岡市域ではいくつかの遺跡で縄文時代後・晩期の可能性がある溝が検出されています(図12)。これらの溝を小規模な水稻農耕の灌漑水路とみる見解があります(吉留2008)。千里遺跡SD4005、4052、4050は層位的に縄文時代晩期の可能性があり、周船寺遺跡SD01は縄文時代晩期(黒川式古段階期)の可能性が高く、清末遺跡SD066は縄文時代後期後葉の可能性が残り、四箇船石遺跡SD0001は縄文時代より後世の可能性があり、田村遺跡SD13、59は縄文時代の可能性があるが判然としないとされます。そして溝の機能と用途については灌漑用水路とする可能性である可能性がありますが、縄文時代後期後葉に低地への進出により、河川氾濫原に面した扇状地内微高地や低位段丘といった潜在的な浸水範囲も利用されるようになったことを考慮すると導水・排水用の水防用水路の可能性も提示されています(板倉2020)。

4. 山麓の遺跡の情報網

山麓と言っても、決して周囲から孤立した存在ではありませんでした。土器型式もきちんと規則を遵守して製作されていることをみても、情報の往来はスムーズであったことを窺うことができます。その一例として南九州に分布の中心がある縄文時代早期後葉の平椀式土器という土器がありますが、南区の柏原遺跡で出土した土器と、鹿児島県霧島市上野原遺跡出土土器は文様・配列、器形などとてもよく類似しています(図13)。鹿児島方面と直接的な関係があったわけではありませんが、ドミノ式でこの集落にも南九州由来の土器の情報が伝わっていたのでしょう。

VII. 海辺の暮らし

1. 縄文時代早期末~前期

福岡市域で海での活動がわかる古い事例は中央区舞鶴の浜の町貝塚です(図14)。ここは江戸時代以降の埋立地ですが、現在の地表から8m下(海拔-6m)で縄文時代早期後半(8400~8100年前)の塞ノ神式土器や石器とともに貝層が発見されています。貝層は原位置を保っているとする見解と二次的に移動したとする見解がありますが、貝類の採捕を行った集落が附近に存在したことでしょう。縄文時代前期にも海浜部での活動がみられます。早良区西新・高取の西新町遺跡

では轟B式・西唐津式・曾畑式土器とともに石鏃、石匙、磨石、石皿などが出土しています。海浜部ですが石鏃から狩猟、石皿・磨石からは植物資源の利用なども考えられ多角的な資源活用をしていたようです。

2. 縄文時代後期の桑原飛櫛貝塚

福岡市域では縄文時代後期の貝塚が今津湾周辺で発見されています。西区の桑原飛櫛貝塚は縄文時代後期初頭、元岡瓜生貝塚は縄文時代後期中葉以降の貝塚です。桑原飛櫛貝塚では長さ 100 m前後、幅 20～30m、厚さ 25～57 cmの貝層が堆積していました(図 15)。二枚貝ではアサリ、マガキ、ハイガイ、オキシジミなど、巻貝ではイボウミニナ、ウミニナ、フトヘナタリ、ヘナタリなどが多く、内湾潮間帯中部の干潟に生息する貝類が卓越しますが、スガイなど外海岩礁性の貝類もみられます。縄文時代後期中葉以降の元岡瓜生貝塚や縄文時代晩期・弥生時代早期の長浜貝塚と比較すると、時期が遅れるにつれマガキの利用が増加する一方、ハイガイの利用が減少することが指摘されています(山崎 1975)。ただしハイガイの依存度は低いとする調査結果もあります(下山 1996)。ウミニナ・ヘナタリ類のブロックが存在し殻頂部が全て欠損していることから、殻頂部を石で叩き割って吸い出す方法で食べていたという推定(山崎 1975)がなされていますが、ところによっては破損率が低く別の食べ方をしていた地点もあったようです(下山 1996)。

自然遺物としては魚類ではサメ、マダイ、クロダイ、ヘダイ、サバ、ヒガンフグ、ズズキなど、哺乳類ではニホンザル、シカ、イノシシ、タヌキ、ネズミ、クジラ、アシカ、イルカなどが出土しています。道具の組成としては石器では石鏃、尖頭器、石槍、石匙など、骨角器ではヤス、結合織釣針、貝錘などがみられます。大型魚を対象とする結合式釣針などの漁具とサメやマダイの大型魚種の骨が出土していることから外洋性の漁撈も行っていたことがわかりますが、石鏃や各種の陸上哺乳類の出土から、海辺の村でも漁撈一辺倒ではなく、狩猟なども行う多角的な生業形態であったことがうかがわれます。

3. 海辺の集落の情報網

桑原飛櫛貝塚では5基の土壌墓が確認され、そのうちSR01では4号人骨・5号人骨の2体の人骨が検出されました(図 16)。5号人骨は小児で、ともに埋葬された4号人骨は女性で右上肢にベンケイガイ製・クマサルボウ製貝輪が14点装着されていました。このような貝輪を着装して埋葬する風習は、芦屋町山鹿貝塚、岡垣町榎坂貝塚、糸島市新町遺跡、対馬市志多留貝塚など玄界灘沿岸の縄文時代後期によくみられます。また、桑原飛櫛貝塚では祭祀に利用されたと考えられるイタボガキ製貝面が出土していますが、同様に対馬市佐賀貝塚でもマガキ製貝面が出土しています。なお、イタボガキは貝層中の貝にはみられなかったため、イタボガキが特別な意図をもって遺跡に運び込まれたか、貝面自体が搬入品であるとも指摘されています(黒住 2017)。いずれにせよ精神面でも玄界灘沿岸一帯で共通性が認められることは、海辺の集落同士での情報網が存在したことを想定させます。

Ⅷ. 海辺の集落と山麓の集落との関係

福岡市域では海辺の集落の様相が資料が乏しく、山麓の集落とどのような関係にあったのかが不明な部分が多いです。山麓の遺跡でも貝殻条痕土器が縄文時代草創期～晩期と広い時期にかけて発見されています。例えば背振山麓の早良区椎原A遺跡では縄文時代前期前葉の轟B式、前期中葉の西唐津式、前期後葉の曾畑式土器の内面を貝殻条痕で調整した土器がみられます(字 17)。土器の製作にあたって用いられるAnadara属の貝(サルボウ、アカガイ、ハイガイなど)が海から山麓までもたらされているか、土器そのものがもたらされるかしなければ出土することではなく、海の集団と山の集団の交流を示していると考えられます(板倉 2020)。また、阿高式系土器の底部には鯨の脊椎骨を台にした痕跡が残っている事例がありますが、山間部の早良区中山遺跡などでも発見されており(図 18-4)、海との交流を想定できます。

Ⅸ. 壱岐・対馬の縄文遺跡との比較

私が長い間、勤務していた壱岐やその隣の対馬にも縄文時代の遺跡が多数あります。壱岐では縄文時代草創期の遺跡は内陸部にありますが、縄文時代早期～後期の遺跡の大部分は岩石海岸の広がる西海岸の潮間帯に所在します。名切遺跡は海岸部に所在する拠点集落の一つですが、ドン

グリピットがみられ植物資源への活用もみられる一方、石銛や鎌崎型スクレイパーと呼ばれる特異な形状の漁具も多く出土し、海産資源への依存も認められます。内陸部にも遺跡がないわけではありませんが石鏃などが少し出土するくらいで野営地や狩猟場としての利用を想定することができる程度です。縄文時代晩期には砂浜海岸のひろがる南・東海岸に遺跡が移動します。対馬でも同様にほとんどの遺跡は海岸に所在します。縄文時代後期の拠点集落として西海岸の志多留遺跡や東海岸の佐賀貝塚がありますが、石鏃など狩猟具のほか結合式釣針など漁具も多く出土し、やはり海からの資源に大きく依存していたものと思われる。

これと比較するとこれまで確認されている福岡市域の遺跡は内陸的性格が強そうです。福岡市域でも能古島や志賀島など島嶼部で縄文時代の遺跡が存在するようです。志賀島では志賀海神社口遺跡では縄文時代前期の曾畑式土器などとともに定角式磨製石斧や石鏃が採集されています。能古島では島内各所で石鏃、磨製石斧、旧石器時代末～縄文時代草創期の神子柴型石斧も採集されています。しかし、強いて海への依存が高いような石器組成とも思われず、壱岐や対馬の状況とは異なります。

こうした点からはあくまでも感想に過ぎませんが、意外と福岡市の縄文時代は山（内陸）的な要素が強い（あるいは対馬や壱岐は海の要素が強すぎる）のではないかとも思います。もちろん山崎純男氏が懸念されたように現在発見されている遺跡が内陸・山間部に偏っている可能性があるということも考慮する必要があり、現在の博多湾の海底や海岸の調査が進展すれば、違った結果になるかもしれませんが、それでも内陸的性格が強いように感じます。

X. 韓半島との交流と海と山

1. 縄文時代後期の様相

西区の桑原飛櫛貝塚では韓半島新石器時代土器の影響を受けた把手附土器が出土しています（木村 1992）（図 19-2）。把手附の韓半島新石器時代土器搬入品は対馬島の吉田遺跡、ヌカシ遺跡などで確認されていますが、九州本島により近いところでは唐津市小川島貝塚（図 19-1）でも出土しています。桑原飛櫛貝塚の集団も、韓半島と直接の交流があったわけではありませんが、対馬島一呼子と続く、海のネットワークにより、間接的に情報もたらされていたものと思われる。

現在検討中で確定的なことはいえませんが、早良区の田村遺跡で出土した把手付土器（図 19-3）はひょっとすると韓半島新石器時代晩期土器の影響を受けた土器の可能性があります。もしそうであれば、桑原飛櫛貝塚のように韓半島新石器時代土器の影響を受けた土器が海辺の遺跡で出土しているので、海辺と山麓間で何らかの情報伝達があったものと考えられるかもしれません。

2. 縄文晩期の様相

縄文時代晩期末とも弥生時代早期ともされる刻目突帯文土器期には板付遺跡や野多目遺跡のように水田が築かれ、磨製石庖丁や抉入片刃石斧など大陸系磨製石器と呼ばれる石器群や土製・石製紡錘車が導入され、赤色磨研壺など精神文化に関わる土器まで韓半島の影響を受けた土器が組成に加わります。このように水稲稲作に伴い、文化複合体として韓半島からの強い影響を受けて弥生時代が開始されますが、それに先立つ縄文時代晩期（黒川式期）にも韓半島との関係を窺うことができる資料があります。

(1) 孔列のある土器

縄文時代晩期と同時期の韓半島は既に青銅器時代に入っています。青銅器時代前期の土器に孔列土器という口縁部に刺突により突瘤を作ったり、それが貫通してしまった土器があります（図 20-1）。黒川式という縄文時代晩期の土器の中に孔列を持つ土器がありますが、これが韓半島の孔列土器と関連があるとする見解があります（田中 1986）。このような土器は福岡市内では田村遺跡（図 20-2, 3）や野多目遺跡（図 20-4）などでも出土しています。韓半島新石器時代の集団と九州の集団との関係は、対馬島を中心に行われ、互いの土器様式に影響を及ぼすことは韓半島の瀛仙洞式～九州の西唐津式を除いてほとんどありませんでした。しかし、マイナーな要素とはいえ縄文土器に韓半島の土器の要素が取り入れられたとすれば、大きな変化がみられたと考えてよいでしょう。ただし、黒川式土器にみられる孔列は韓半島の孔列とは無関係であるという

慎重論も存在します。

(2) 磨製石庖丁

穀物の収穫具である磨製石庖丁刃はもともと縄文社会にはありませんでした。韓半島南部では青銅器時代早期から存在しました。北九州市貫川遺跡では黒川式期の層から磨製石庖丁が出土したことがあります。黒川式期には磨製石庖丁は一般的ではなく、福岡市域でも黒川式期の磨製石庖丁は確認されていません。武末純一氏は貫川遺跡出土の磨製石庖丁は刻目突帯文土器期の水稻農耕文化に先立つ動きであるが、根付かなかった農業文化であったという評価をしています（前田・武末 1994）。

3. 韓半島との交流における海と山の関係

縄文時代前期～後期（韓半島の新石器時代に相当）の対馬島には土器をはじめとする韓半島系遺物が集中するため、韓半島からの渡航集団の最終目的地は対馬島であったとみられ（古澤 2018）、海の集団が交流の主体であったといえます。福岡市では海への依存度が高い桑原飛櫛貝塚で韓半島系土器が出土していることも関係があるでしょう。ただし、もし、田村遺跡の把手付土器が韓半島系の土器であれば、山（内陸）の集団にもわずかに韓半島に起源をもつ情報が伝わっている可能性があります。この状況が大きく変化するのが、黒川式期（縄文時代晩期）で、それほど多くの比率を占めることはありませんでしたが韓半島の土器の要素である孔列が縄文土器に取り入れられたり、定着はしませんでした。磨製石庖丁がもたらされました。これらの事象を積極的に解釈すれば、韓半島からの渡航集団が九州本島の集団と接触した可能性を想起させます。特に、海の集団との接触を越えて、山（内陸部）の集団との接触も考えられるかもしれません。そのような脈絡で、黒川式期に起きた変化、すなわち低地の低丘陵・段丘への進出や、溝の掘削などを解釈することはできないでしょうか？いずれにせよ、黒川式期の日韓交流の姿はそれまではみられなかったもので大きな変化であると言えます。

XI. おわりに

多様な縄文時代の暮らしをみてきました。弥生時代以前にも福岡市域では自然環境に応じて暮らしを営み、また、他地域とも交流してきたことがわかります。今後も調査研究を深化することで様々なことがわかってくることでしょう。弥生時代より前の時代にも少しでも多くの人に関心をもっていただければと願っています。

文献

- 泉拓良 2013 「縄文文化の展開と地域性」 『講座日本の考古学 3 縄文時代 上』 青木書店
- 板倉有大 2020a 「縄文時代後・晩期の溝状遺構」 『遺跡学研究の地平』 吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
- 板倉有大 2020b 「縄文時代の海岸線」 『新修福岡市史資料篇考古②』 福岡市
- 小畑弘己 2016 『タネをまく縄文人』 歴史文化ライブラリー416, 吉川弘文館
- 小畑弘己 2018 「北部九州における弥生時代開始期の穀物組成」 『市史研究ふくおか』 13
- 木村幾多郎 1992 「把手付土器の二者」 『季刊考古学』 38
- 工藤雄一郎 2011 「東黒土田遺跡の堅果類と縄文時代草創期土器群の年代に関する一考察」 『考古学研究』 58-1
- 工藤雄一郎 2014 「縄文時代草創期土器の煮炊きの内容物と植物利用」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 187
- 工藤雄一郎 2015 「土器の出現とその意義」 『季刊考古学』 132
- 黒住耐二 2017 「東アジアにおける貝製仮面およびその類似製品に利用された貝類の同定」 『千葉県立中央博物館研究報告—人文科学—』 13-2
- 下山正一 1996 「桑原飛櫛貝塚の自然遺物（その1）—貝類について」 『桑原遺跡群 2』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 480 集
- 菅波正人 2007 「福岡市域における縄文時代草創期～早期前半の遺跡の様相」 『九州における縄文時代早期前葉の土器相』 九州縄文研究会
- 田中良之 1986 「縄紋土器と弥生土器 1. 西日本」 『弥生文化の研究 3 弥生土器 I』 雄山閣

谷口康浩 2005 「極東における土器出現の年代と初期の用途」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』16

福岡市史編纂委員会編 2016 『新修福岡市史資料篇考古1』福岡市

福岡市史編纂委員会編 2020 『新修福岡市史資料篇考古2』福岡市

古澤義久 2018 『東北アジア先史文化の変遷と交流』六一書房

本田浩二郎 2013 「縄文時代」『史唾然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史特別編

前田義人・武末純一 1994 「北九州市貫川遺跡の縄文晩期の石庖丁」『九州文化史研究所紀要』39

水ノ江和同 2013 『九州縄文文化の研究』雄山閣

山崎純男 1975 「九州地方における貝塚研究の諸問題」『九州考古学の諸問題』東出版

山崎純男 2005 「西日本縄文農耕論」『韓・日 新石器時代の農耕問題』第6回 韓・日 新石器時代 共同学術大会 発表要旨集

山崎純男 2007 「九州縄文時代生業活動の展開」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会

吉留秀敏 2008 「北部九州縄文時代後期から晩期社会の特質」『月刊文化財』542

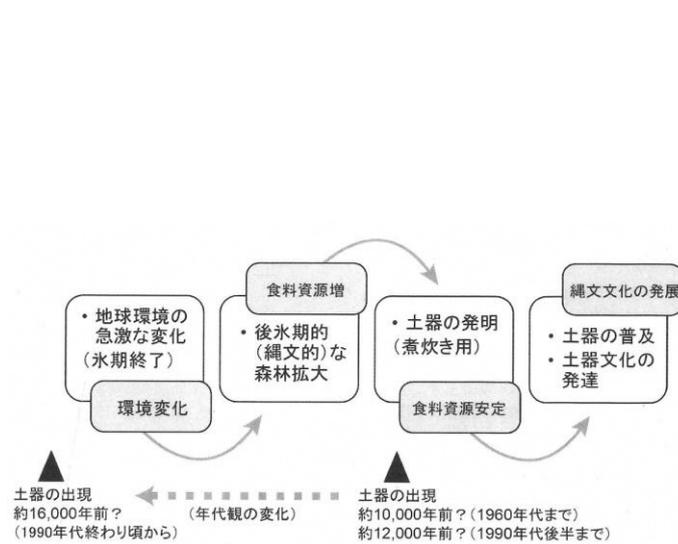


図1 土器出現の一般的な理解と年代観の変化 (工藤 2011)

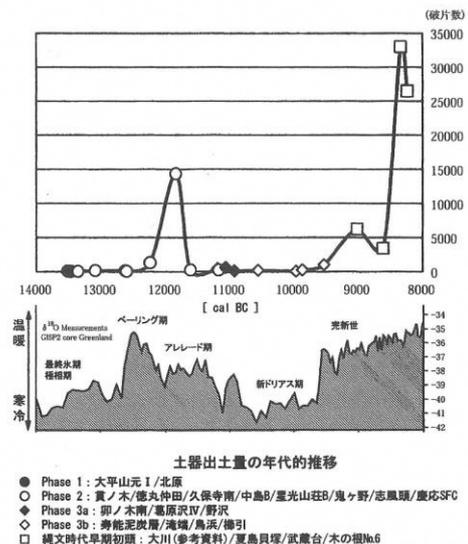


図2 土器出土量の年代的推移 (谷口 2005)

時間の流れ	西北九州	南九州	温暖期	後氷期	完新世
	燃系文土器・押型文土器 松木田式: 約11,200~10,600 cal BP ex.) 松木田など	④ 貝殻文系土器 桜島13火山灰 (Sz-13): 約10,600 cal BP 岩本式: 約11,300 cal BP~?			
	刺突文土器・条痕文土器など (約12,800~12,500 cal BP) ex.) 大原Dなど	③ 不明な時期 (爪形文土器?) (水迫式?) (約12,800~11,650 cal BP) 桜島薩摩火山灰 (Sz-S): 約12,800 cal BP			
	(測定例がなく不明)	② 隆帯文土器 (前半) 爪形文土器・無文土器 (後半) (約14,000~12,800 cal BP) ex.) 東黒土田, 三角山I, 奥ノ仁田, 鬼ヶ野, 屋久川, 塚原, 建昌城跡など			
	隆起線文土器+爪形文土器 (約15,000~14,000 cal BP) ex.) 福井洞窟, 泉福寺洞窟, 河陽Fなど	① 隆帯文土器以前の土器? (約14,000 cal BP以前?) ex.) 加治屋園, 横井竹ノ山など?			
					後氷期更新世
					温暖期

南九州と西北九州の縄文時代草創期から早期初頭の土器群の年代的位置づけ

図3 縄文時代草創期～早期初頭の土器群と気候変動との関係 (工藤 2011)

表1 東アジアにおける土器出現期

地域	文化	年代	土器	土器底部	製作法	土器文様	細石刃	両面加工 尖頭器	鏃(弓 矢)	磨盤・磨 棒	アワ・キ ビ	イネ	水産資源	イヌ	墓地	主な遺跡
東シベリア		13000年前～	○	丸底	紐づくり	多歯具に よるジグ ザグ文、 条痕	○	○								ウスチノ フカ3・ カーレン ガ
アムール中流域		15000年前～	○	丸底	紐づくり	縄文・絡 条体・円 孔文	○	○								グロマ トウーハ
アムール下流域	オンボフカ文化	15500年前～	○	平底	紐づく り・パッ チワーク	条痕文、 絡条体庄 痕文、円 孔文、多 歯具によ るジグザ グ文、隆 起縞文	○	○	○				○			ガー シヤ、ゴ ンチャル カ1
沿海州		10000年前～	○	平底	紐づくり	条痕文、 円孔文	○	○	○				○			ウスチノ フカ3
日本列島・九州		16000年前～	○	平底	紐づくり	豆粒文、 隆起文、 爪形文、 押引文	○	○	○				○			泉福寺洞 窟、福井 洞窟
嫩江流域	後套木嘎第一期文化	12900～11100年前	○	平底	紐づくり	刺突文、多 歯具押庄 文							○	○	屈葬	後套木嘎
燕山山脈南部		12000年前～	○	平底	紐づくり	押庄文、 縄文、隆 起文			○	○	○		○	○	屈葬	南荘頭、 東胡林
モンゴル高原南部	裕民文化	13500～10000年前 8400～7600年前	○	丸底	粘土貼り つけ	麻点文 (編織 文)	○		○	○				○	座葬	興隆 興隆、裕 民
華南・華中		20000年前～	○	丸底	粘土貼り つけ・タ タキ	縄文打 捺、条痕 文			○							仙人洞、 玉蟾岩

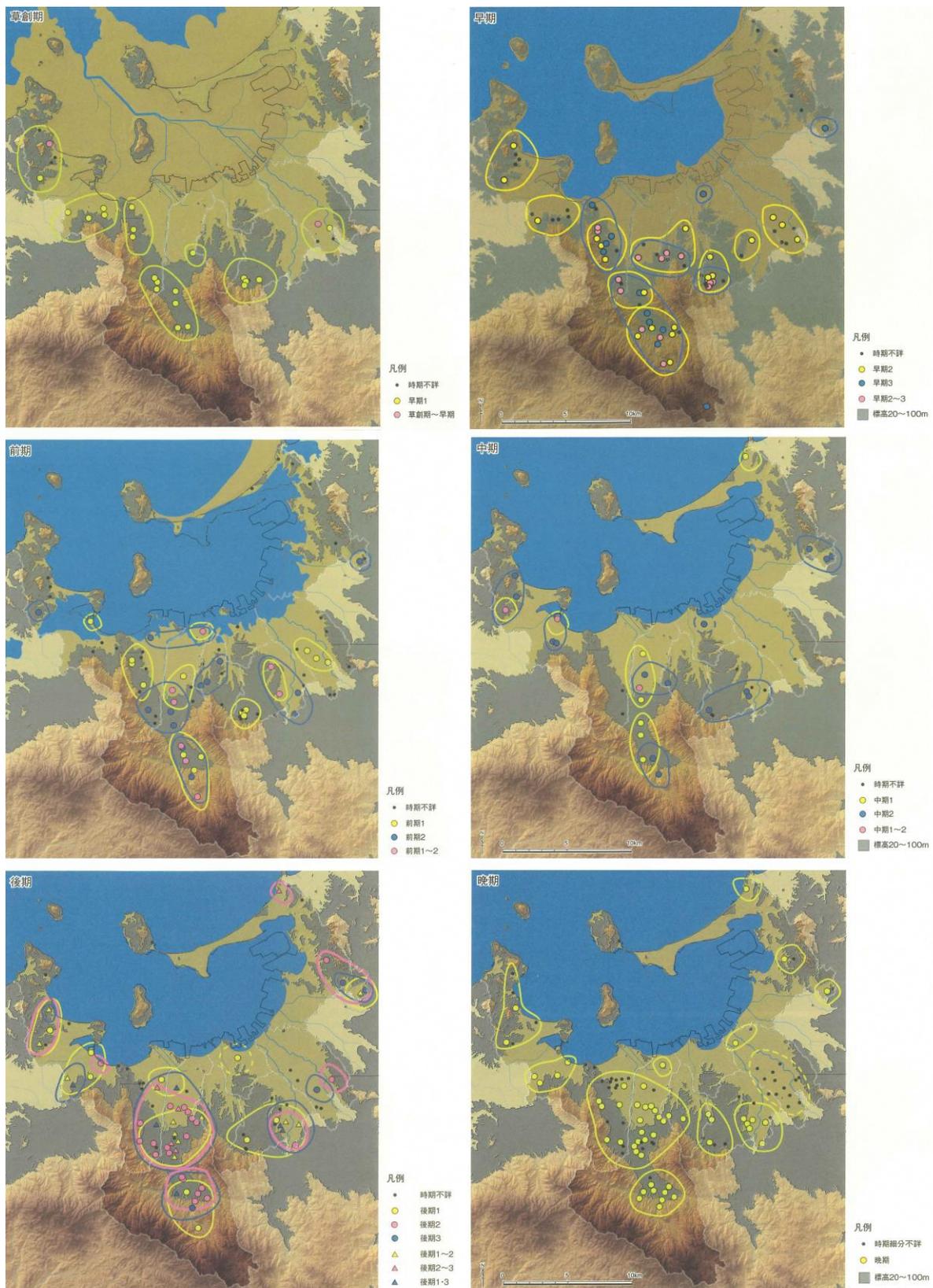
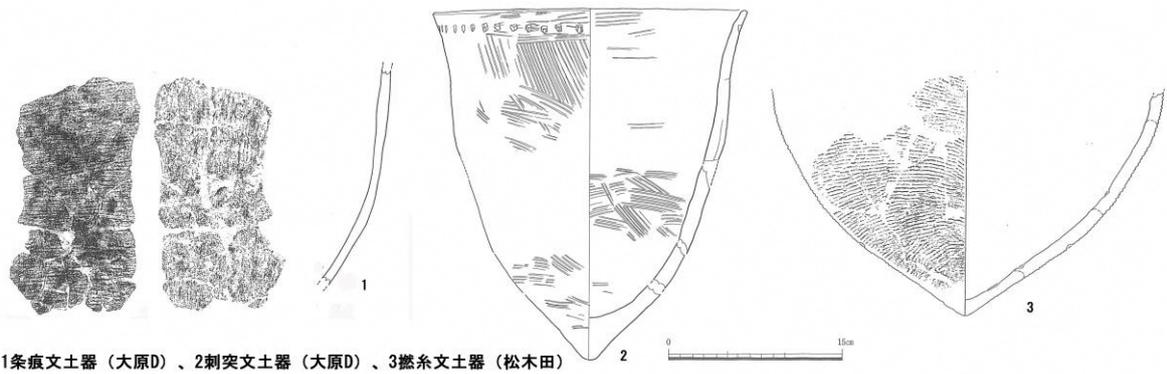


図4 福岡市の縄文時代遺跡の分布 (本田 2013)

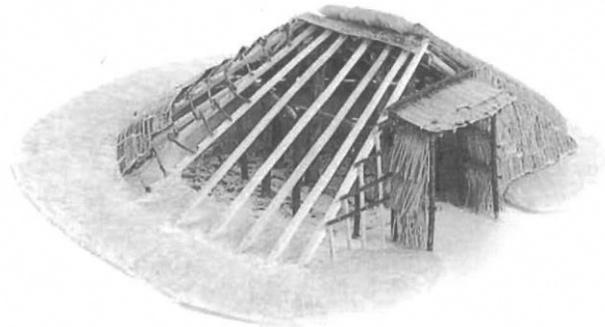


1条痕文土器（大原D）、2刺突文土器（大原D）、3燃糸文土器（松木田）

図5 福岡市域出土縄文時代草創期～早期土器



14区Ⅲ層 SC003 実測図 (S = 1/80)



14区Ⅲ層 SC003 復元案

図6 大原D遺跡SC（住居）003（福岡市史編纂委員会編 2016）

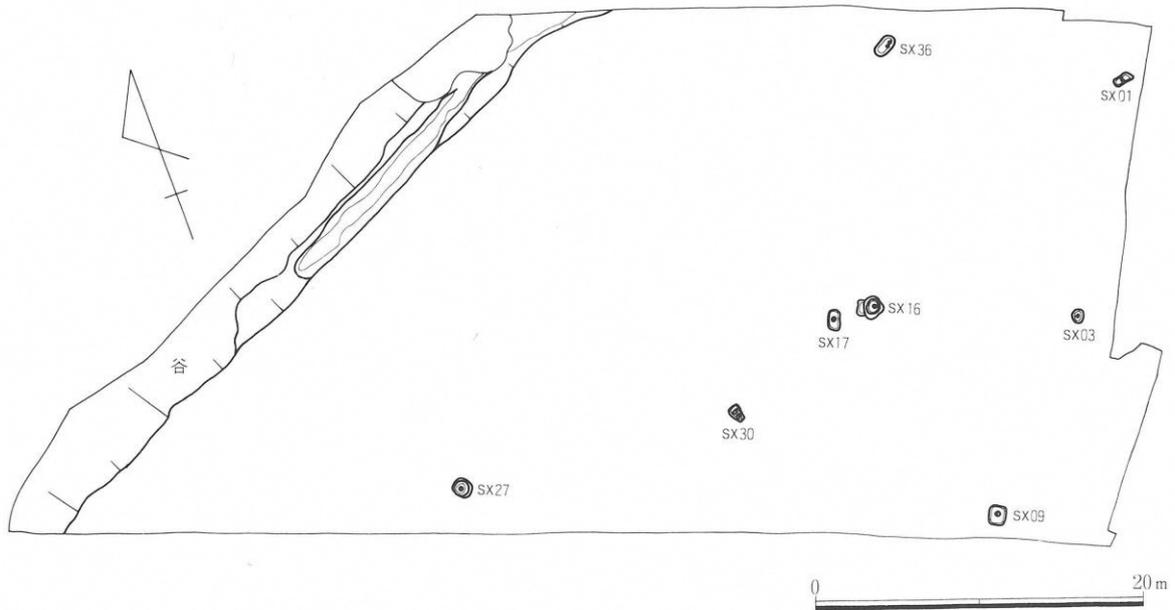


図7 梅林遺跡陥し穴

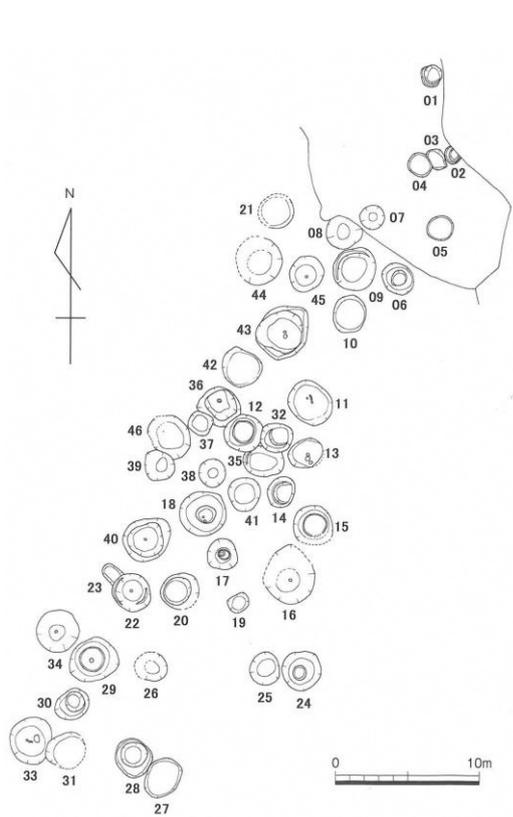


図8 吉武遺跡群貯蔵穴(福岡市史編委編 2016)

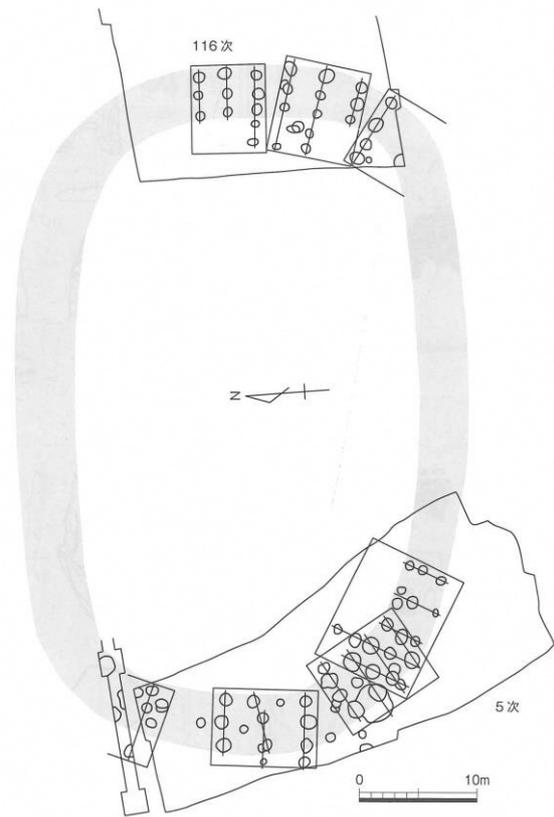


図9 有田遺跡群貯蔵穴(福岡市史編委編 2016)

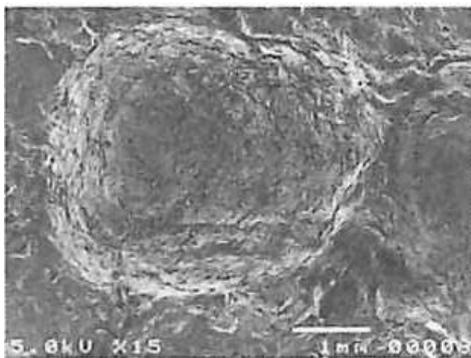


図10 四箇遺跡出土土器アズキ圧痕(小畑 2016)

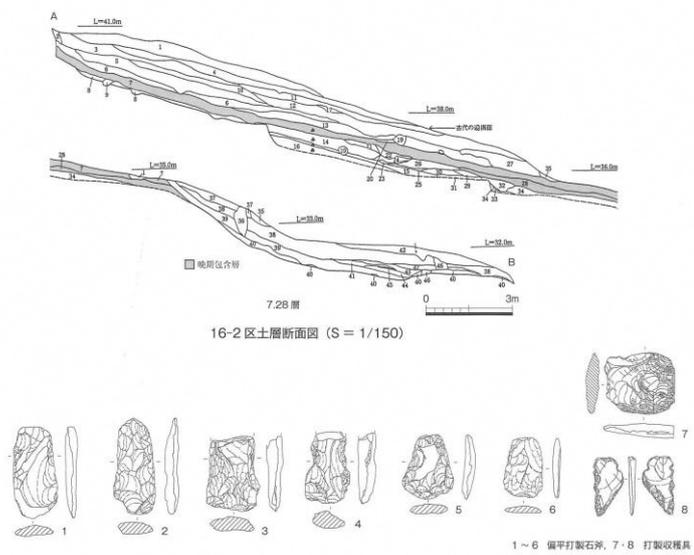
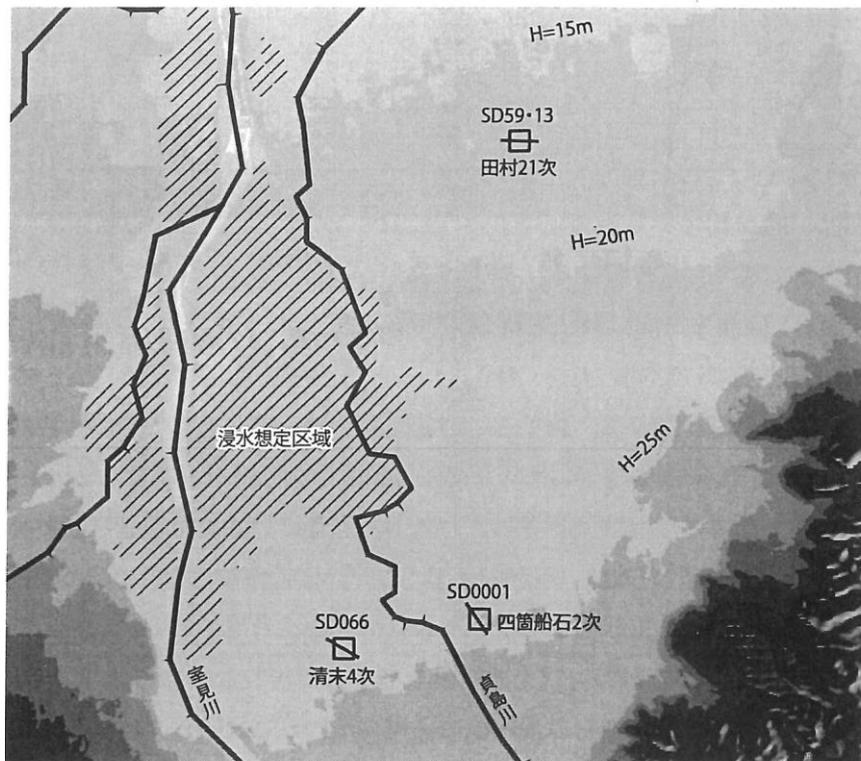


図11 大原D遺跡焼畑とされる遺構と出土打製石斧(福岡市史編纂委員会編 2016)



遺跡位置上の線は溝の方向を示す

0 1km

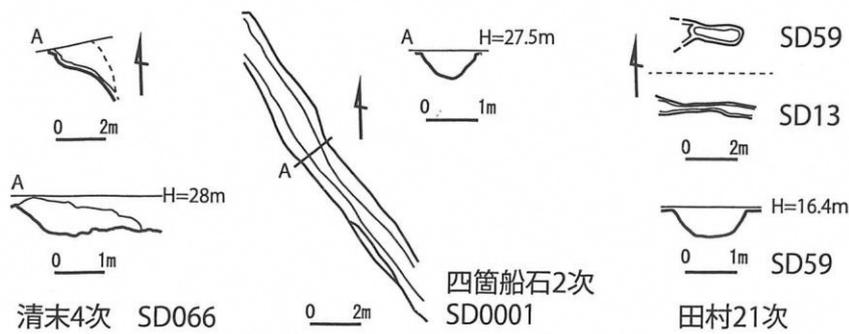


図 12 早良平野縄文時代後・晩期溝状遺構 (板倉 2020a)

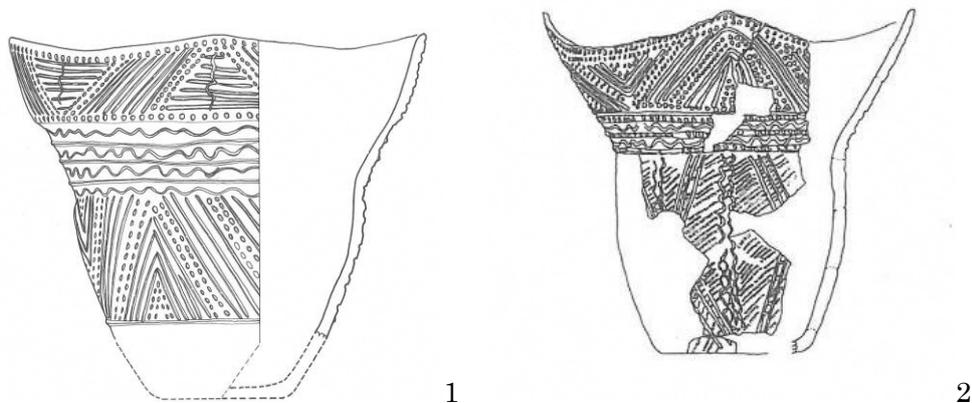


図 13 平椀式土器 (1 福岡市南区柏原遺跡, 2 鹿児島県霧島市上野原遺跡)

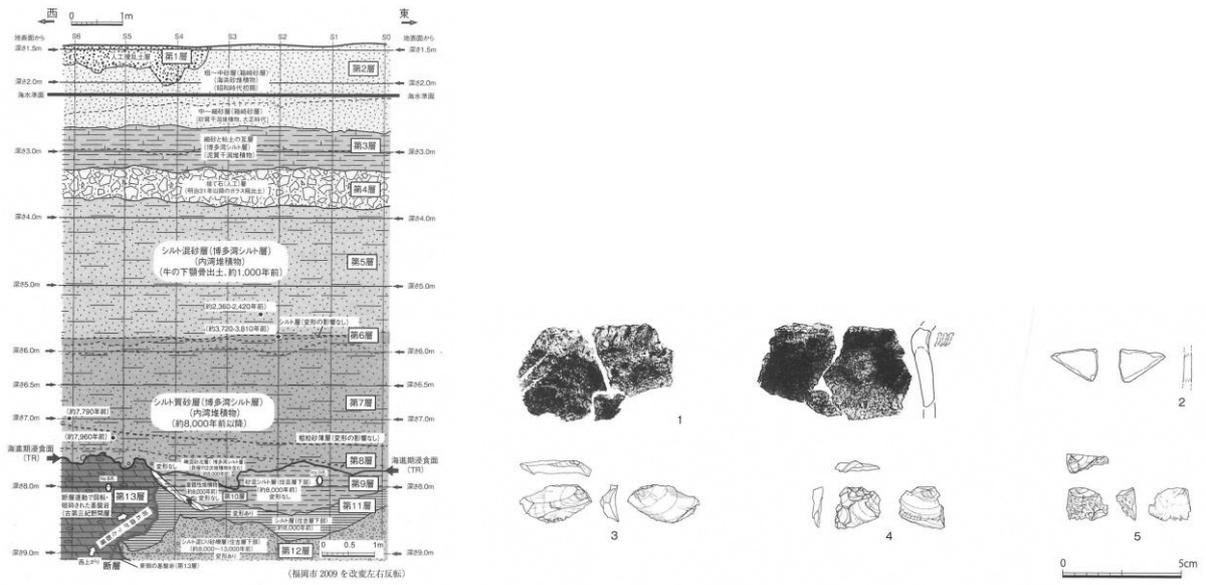


図 14 浜の町貝塚土層と出土遺物 (福岡市史編委編 2020)



図 15 桑原飛櫛貝塚貝層



図 16 桑原飛櫛貝塚 1号土壙墓

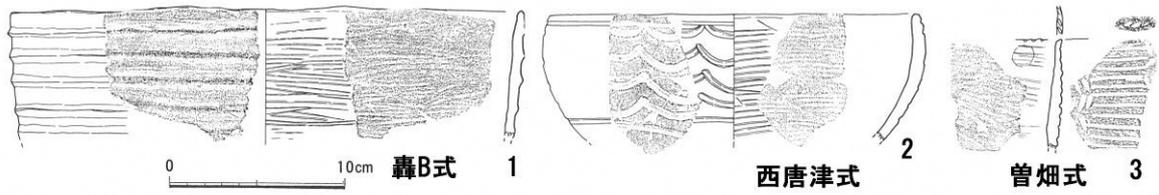


図 17 椎原 A 遺跡出土縄文時代前期土器

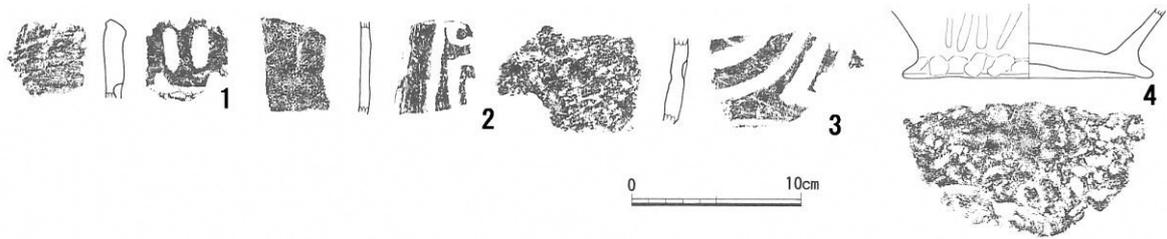
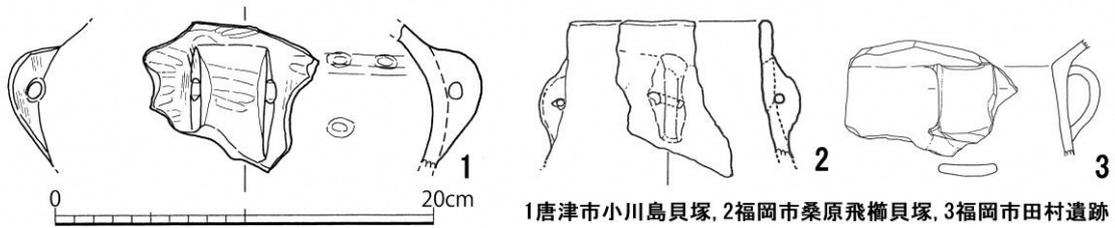
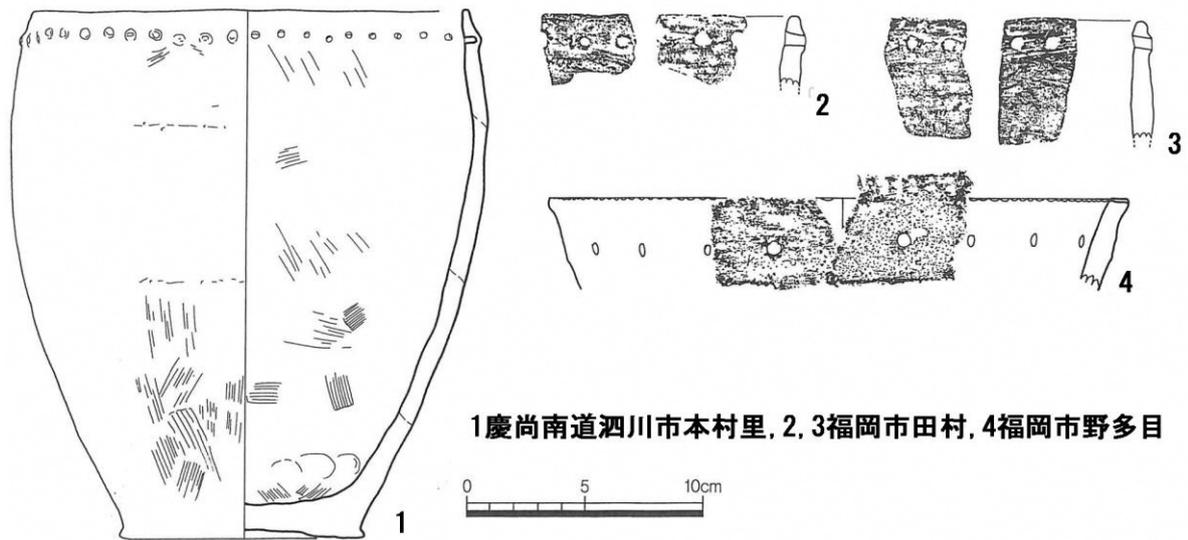


図 18 中山遺跡出土阿高式系土器



1唐津市小川島貝塚, 2福岡市桑原飛櫛貝塚, 3福岡市田村遺跡

図 19 韓半島新石器時代把手附土器と関連土器



1慶尚南道泗川市本村里, 2, 3福岡市田村, 4福岡市野多目

図 20 韓半島の孔列土器と福岡市内出土孔列土器